

わかれ道

樋口一葉

青空文庫

上

お京さん居ますかと窓の戸の外に来て、ことごとと羽目を敲く
 音のするに、誰れだえ、もう寢て仕舞つたから明日来てお呉れと
 嘘を言へば、寢たつて宜いやね、起きて明けてお呉んなさい、傘
 屋の吉だよ、己れだよと少し高く言へば、いやな子だね此様な遅
 くは何を言ひに来たか、又お餅のおねだりか、と笑つて、今あけ
 るよ少時辛防おしと言ひながら、仕立かけの縫物に針どめ
 して立つは年頃二十餘りの意氣な女、多い髪の毛を忙しい折
 からとて結び髪にして、少し長めな八丈の前だれ、お召の臺

なしな半はんでん天てんを着きて、急いそぎ足あしに沓くつ脱ぬぎへ下おりて格子戸かうしどに添そひし雨あ
まど戸あを明あくれば、お氣きの毒どくさまと言いひながらずつと這はい入はいるは一寸いつすん法ぽう
ぼし師あだなと仇あだな名なのある町ちやうない内ないの暴あばれ者もの、傘屋かさやの吉きちとて持もて持もて餘あましの小僧こそう
としなり、年としは十じふ六ろくなれども不ふ圖とみ見とこる處いは一いちか二にか、肩かた幅はたせばく
かほひ顔かほ少せうさく、目め鼻はなだちはきりくると利り口こうらしけれどいかに脊せいの矮ひく
ひあざけければ人ひと嘲あざりて仇あだな名なはつけゝる、御免ごめんなさい、と火鉢ひばちの傍そばへづか
ゆくゆと行ゆけば、お餅もちを焼やくには火ひが足たらないよ、臺だい所どころの火ひけし
つぽ消け壺づみから消けし炭もを持もつて來きてお前まへが勝かつて臺だいに焼やいてお喰たべ、私わたしは
こんやちゆう今こん夜や中ちゆうに此これ一ひと枚まいを上げねばならぬ、角かどの質屋しちやの旦那だんなどのが御ご
ねんしぎ年ねん始し着しぎだからとて針はりを取とれば、吉きちはふふんと言いつて彼あの元げ頭あたま
をには惜おしい物ものだ、御初穂おはつうを己おれでも着きて遣やらうかと言いへば、馬鹿ばか

をお言ひでない人のお初穂を着ると出世が出来ないと言ふでは
 ないか、今つから伸びる事が出来なくては仕方が無い、其様な事
 を他處の家でもしては不可よと氣を附けるに、己れなんぞ御
 出世は願はないのだから他人の物だらうが何だらうが着かぶつ
 て遣るだけが徳さ、お前さん何時か左様言つたね、運が向く時に
 なると己れに糸織の着物をこしらへて呉れるつて、本當に調
 製へて呉れるかえと眞面目だつて言へば、それは調製へて上げら
 れるやうならお目出度のだもの喜んで調製へるがね、私が姿を見
 てお呉れ、此様な容躰で人さまの仕事をして居る境界では
 なからうか、まあ夢のやうな約束さとして笑つて居れば、いゝや
 なそれは、出来ない時に調製へて呉れとは言はない、お前さんに

運うんの向むいた時ときの事ことさ、まあ其その様ような約やく束そくでもして喜よろこばして置おいて
お呉くれ、此この様ような野郎やろうが糸織いとおりぞろへを被かぶつた處ところがをかしくも無ない
けれどもと淋さびしさうな笑顔ゑがほをすれば、そんなら吉きちちやんお前まへが出し
ゆつせ世ときの時わたくしは私わたしにもしてお呉くれか、其約束そのやくそくも極きめて置おきたいねと
微笑ほくゑんで言いへば、其奴そのいつはいけない、己おれは何どうしても出し世ゆつせなん
ぞは爲しないのだから。何故なぜ々々。何故なぜでもしない、誰だれが來きて無む
理りやりに手てを取とつて引ひ上げても己おれは此處ここに斯かうして居ゐるのがいゝ
のだ、傘屋かさやの油あぶら引きが一番いちばん好いいいのだ、何どうで盲目めくら縞じまの筒つ
袖でに三さん尺じやくを脊負しよつて産でて來きたのだらうから、澁しぶを買かひに行ゆ
く時ときかすりでも取とつて吹矢ふきやの一いつ本ぽんも當あたりを取とるのが好いいい運うんさ、
お前まへさんなどは以前もとが立派りつぱな人ひとだといふから今いまに上じやう等とうの運うんが

馬車ばしやに乗のつて迎むかひに來きやすのさ、だけれどもお妾めかけになるといふ謎なぞ
 では無ないぜ、悪わるく取とつて怒おこつてお呉くんなさるな、と火ひなぶりをし
 ながら身みの上うへを歎なげくに、左さう様さ馬車ばしやの代かはりに火ひの車くるまでも來くるであ
 らう、隨ずあふんむね分ぶん胸むねの燃もえる事ことがあるからね、とお京きやうは尺せきを杖つゑに振ふり
 返へりて吉きち三ざうが顔かほを諦まも視もりぬ。
 例いつもごとの如ごとく臺だい所どころから炭すみを持もち出だして、お前まへは喰くひなさらないか
 と聞きけば、いゝえ、とお京きやう頭あたまをふるに、では己おればかり御馳走ごちそう
 まにならうかな、本ほん當たうに自家うちの吝けちんぼう嗇ぼう奴めやかましい小言こごとばか
 り言いやがつて、人ひとを使つかふ法はふをも知しりやがらない、死しんだお老婆おばあさ
 んはあんなのでは無なかつたけれど、今こんど度どの奴等やつらと來きたら一人ひとりとし
 て話はなせるのは無ない、お京きやうさんお前まへは自家うちの半次はんじさんを好すきか、隨ず

あぶんいやみ
分厭味ぶんいやみに出來あがつて、いゝ氣きの骨こつちやう頂やつの奴やつではないか、己お
れは親方おやかたの息子むすこだけれど彼奴あいつばかりは何うしても主人しゆじんとは思おも
はれない、番ばんごと喧嘩けんくわをして遣り込めてやるのだが随分ずぶんおも
しろいよと話はなしながら、鐵網かなあみの上うへへ餅もちをのせて、おゝ熱々あつくと
指先ゆびさきを吹ふいてかゝりぬ。

己おれは何どうもお前まへさんの事ことが他人たにんのやうに思おもはれぬは何どういふ
ものであらう、お京きやうさんお前まへは弟おとといふを持つた事ことは無ないのかと
問とはれて、私わたしは一人子ひとりごで同きやうだい胞おとなしだから弟おとにも妹いもにも持つた
事ことは一度いちども無ないと言いふ、左様さやうかなあ、それでは矢張やつぱり何なんでも無ない
のだらう、何處どこからか斯かうお前まへのやうな人ひとが己おれの眞身しんみの姉あねさん
だとか言いつて出でて來きたらどんなに嬉うれしいか、首くびつ玉たまへ嚙かじり着ついて

己おれはそれぎり往わうじやう生しょうしても喜よろこぶのだが、本ほんたう當たうに己おれは木きの
 股またからでも出でて來きたのか、つひしか親しんるゐ類るゐらしい者ものに逢あつた事ことも
 無ない、それだから幾いくど度も幾いくど度も考かんがへては己おれはもう一いつしやうだ生しょう誰だれ
 にも逢あつた事ことが出來できない位くらゐなら今いまのうち死しんで仕しま舞まつた方ほうが氣き樂らくだ
 と考かんがへるがね、それでも慾よくがあるから可を笑かしい、ひよつくり變へんて
 こな夢ゆめなんかをみてね、平ふだん常じょう優やさしい事ことの一ひとこと言いも言いつて呉くれる人ひと
 が母おふくろ親おやぢや親おやぢ父あねや姉あにさんや兄おもさんのやうに思おもはれて、もう少すこし生い
 きて居ゐるやうかしら、もう一年ねんも生いきて居ゐたら誰だれか本ほんたう當たうの事ことを
 話はなして呉くれるかと樂たのしんでね、面おも白しろくも無ない油あぶら引ひきをやつて
 居ゐるが己おれ見みたやうな變へんな物ものが世せ間けんにも有あるだらうかねえ、お京きやう
 さん母おふくろ親おやぢも父おやぢ親からも空あてつなきり當あてが無ないのだよ、親おやなしで産うまれて來く

る子があらうか、己れは何うしても不思議でならない、と焼あがりし餅を両手でたゝきつゝいつも言ふなる心細さを繰返せば、それでもお前笹づる錦の守り袋といふやうな證據は無いのかえ、何か手懸りは有りさうなものだねとお京の言ふを消して、何其様な氣の利いた物は有りさうにもしない生れると直さま橋の袂の貸赤子に出されたのだなど、朋輩の奴等が悪口をいふが、もしかすると左様かも知れない、それなら己れは乞食の子だ、おふくろおやぢこじきおもてとほほろささやつや母親も父親も乞食かも知れない、表を通る檻樓を下げた奴が矢つぱりお親類まきで毎朝きまつて貰ひに来る跛隻眼のあ張己れが親類まきで毎朝きまつて貰ひに来る跛隻眼のあ婆あ何かゞ己れの爲の何に當るか知れはしない、話さないでもお前は^{まへ}大抵^{たいてい}知^しつて居^ゐるだらうけれど^い今の傘屋^{かさや}に奉^{ほう}公^{こう}する前^{まへ}は

やつぱりお矢張己れは角兵衛の獅子を冠つて歩いたのだからと打しをれて、
 お京さん己れが本當に乞食の子ならお前は今までのやうに可愛
 がつては呉れないだらうか、振向いて見れば呉れまいねと言ふに、
 串戯をお言ひでないお前が何のやうな人の子で何んな身かそ
 れは知らないが、何だからとつて厭がるも厭がらないも言ふ事は
 無い、お前は平常の氣に似合ぬ情ない事をお言ひだけれど、私が
 少しもお前の身なら非人でも乞食でも構ひはない、親が無からう
 が兄弟が何うだらうが身一つ出世をしたらば宜からう、何
 故其様な意氣地なしをお言ひだと勵ませば、己れは何うしても駄
 目だよ、何にも爲やうとも思はない、と下を向いて顔をば見せざ
 りき。

中

今いまは亡うせたる傘屋かさやの先代せんだいに太ふと腹ばらのお松まつとて一代いちだいに身しんじや
 上うをあげたる、女相撲をんなずまふのやうな老婆ばうさま様ありき、六年ろくねん前の冬まへふゆ
 の事こと寺てら参まゐりの歸かへりに角兵衛かくべゑの子供こどもを拾ひろふて來きて、いゝよ親方おやかた
 からやかましく言いつて來きたら其時そのときの事こと、可か愛あい想さうに足あしが痛いたくて
ある歩あるかれないと言いふと朋輩ほうばいの意地悪いぢわるが置去おきざりに捨すてゝ行いつたと言い
 ふ、其様そのんな處ところへ歸かへるに當あたるものか些ちつとも怕おつかない事ことは無ないから私わたし
 が家うちに居ゐなさい、みんなも心配しんぱいする事ことは無ない何なんの此子位このゑらゐのもの
 二人ふたりや三人さんにんや臺だいどころ所ところへ板いたを並ならべてお飯まんまを喰たべさせるに文句もんくが

入るものか、はんししょうもん 判證文を取つた奴でもかけおち 驅落をするもあれば持
ち 逃げのけち 吝な奴もある、れうけんしだい 料簡次第のものだわな、いはゞ馬うまには乗
 つて見ろさ、やく 役に立つか立たないか置いて見なけりや知れはせん、
まへしんあみ お前新網へかへ 歸るがいや 厭なら此家こゝを死場しにばと極きめて骨ほねを折をらなきやな
 らないよ、しつかり遣つてお呉くれと言いひ含ふくめられて、吉きちやくと
そ 夫れよりの丹精たんせい今油いまぶらひきに、おとなさんにんまへ 大人三人前いつてを一手ひきに引ひうけて鼻
なうたまじ 嗅交やり遣つて退のける腕うでを見るもの、さすが 流石めがねに眼鏡なと亡なき老婆ひとをほ
 めける。

おん 恩ある人ひとは二年目にねんめに亡うせて今いまあるじかみさまも内儀むすこ様も息子はんじの半次きも氣きに
く 喰ものはぬ者のみなれど、こゝ 此處しにばを死場さだと定さだめたるなればいや 厭さらとて更さらに何
づかた 方ゆに行くべき、身みは疝かんしやく癩やくに筋骨すぢほねつまつてか人ひとよりは一寸いっす

法師一寸法師と誹らるゝも口惜しきに、吉や手前は親の日に腥さを喰たであらう、ざまを見る廻りの廻りの小佛と朋輩の鼻垂れに仕事の上の仇を返されて、鐵拳に撲倒す勇氣はあれど誠に父母いかなる日に失せて何時を精進日とも心得なき身の、心細き事を思ふては干場の傘のかげに隠れて大地を枕に仰向き臥してはこぼるゝ涙を呑込みぬる悲しさ、四季押通し油びかりする目くら縞の筒袖を振つて火の玉のやうな子だと町内に恐がられる亂暴も慰むる人なき胸苦しきの餘り、假にも優しう言ふて呉れる人のあれば、しがみ附いて取つて離れがたなき思ひなり。仕事屋のお京は今年の春より此裏へと越して來し者なれど物事に氣才の利きて長屋中への交際もよく、

おほや 大屋なれば傘屋の者へは殊更ことさらに愛想あいさうを見せ、小僧こぞうさん達たち着るもの
 のほころびでも切れたなら私わたしの家へ持つてお出いで、お家は御多人ごたに
 数かずお内儀かみさんの針はり持つていらつしやる暇ひまはあるまじ、私わたしは常じやうじ
 住ゆうしごとたうくびくびびきびきみみ 住ひ仕事しごと疊紙たがひと首くびつ引ひの身みなればほんの一ひと針造作はりごうさは無ない、一人ひとり
 住ずまるあひて 住居あひての相手あひてなしに毎まい日にち毎夜まいやさびしく暮くらして居ゐるなれば手てすきの
 時ときには遊あそびにも來きて下くだされ、私わたしは此こん様んながらがらした氣きなれば吉きつ
 ちやんのやうな暴あばれさんが大だい好すき、疳かん癩しやくがおこつた時ときには表おもて
 の米屋こめやが白しろ犬いぬを擲はると思おもふて私わたしの家の洗あらひかへしを光澤つや出だしの
 小槌こづちに、碯きぬたうちでも遣やりに來きて下くだされ、それならばお前まへさんも人ひと
 に憎にくまれず私わたしの方ほうでも大おほ助だすかり、ほんに兩りやうだめだめで御座ござんすほ
 どにと戲じやう言だんまじり何時いつとなく心こゝろ安やすく、お京きやうさんお京きやうさん

とて入いり浸びるを職しよく人にんども挑から發かひては帶おび屋やの大たい將しやうのあちら
 こちら、桂かつら川がはの幕まくがで出ときる時はお半はんの脊せなに長ちやう右う衛ゑ門もんと唱うたはせ
 て彼あの帶おびの上うへへちよこなんと乗のつて出でるか、此こ奴いつは好いいお茶ちや番ばん
 だと笑わらはれるに、男をとこなら眞ま似ねて見みろ、仕し事ごとやの家うちへ行いつて茶ちや棚だな
 の奥おくの菓子鉢くわしの中なかに、今けふ日は何なにが何い箇くつあるまで知しつて居ゐるのは
 恐おそらく己おれの外ほかには有あるまい、質しちや屋やの元はげあたま頭きやうめお京きやうさんに首くびつ
 たけで、仕し事ごとを頼たのむの何なにが何どうしたとか小こうるさく這はい入り込こんでは
 前まへだれの半はん襟えりの帶おびつ皮かはのと附つけとッけ屈くをして御ご機き嫌げんを取とつては居ゐ
 るけれど、つひしか喜よろこんだ挨あい拶さつをした事ことがない、ましてや夜よるで
 も夜中よなかでも傘かさ屋やの吉きちが來きたとさへ言いへば寢ね間ま着まのまゝで格かう子し戸とを
 明あけて、今けふ日は一いち日にち遊あそびに來こなかつたね、何どうかお爲しか、案あんじ

て居たにと手を取つて引入れられる者が他にあらうか、お氣の毒
 くさま 様なこつたが獨活の大木は役にたゝない、山椒は小粒で珍
 んちよう 重 されると高い事をいふに、此野郎めと脊を酷く打たれて、
 あり 有がたう御座いますと澄まして行く顔つき身長さへあれば人串
 だん 戯 とて恕すまじけれど、一寸法師の生意氣と爪はじきして好い
 なぶ 髯りものに烟草休みの話しの種なりき。

下

じふにぐわつさんじふにち 十一月三十日の夜、吉は坂上の得意場へ詔への日限の
 おく 遅れしを詫びに行きて、歸りは懐 手の急ぎ足、草履下駄の先

にかゝるものは面白づくに蹴かへして、ころくと轉げる、右みぎ
ひだりに左に追ひかけては大溝の中へ蹴落して一人からくと高笑たかわら
 ひ、聞く者なくて天てんじやう上のお月さま宛も皓々と照し給ふを寒さぶ
 といふ事知らぬ身なれば唯こちよく爽かにて、歸りは例の窓まど
 を敲いてと目算ながら横町を曲れば、いきなり後より追ひお
 すがる人の、兩手に目を隠して忍び笑ひするに、誰れだ誰れだだ
 と指を撫で、何だお京さんか、小指のまむしが物を言ふ、嚇かおど
 しても駄目だよと顔を振のけるに、憎らしい當てられて仕舞つたしま
わらと笑ひ出す。お京はお高祖頭巾眉深に風通の羽織着て例に似合にあは
 ぬ美き粧なるを、吉三は見あげ見おろして、お前何處へ行きなゆ
 すつたの、今日明日は忙がしくてお飯を喰べる間もあるまいと言い

ふたではないか、何處へお客様にあるいて居たのと不審を立
 てられて、取越しの御年始さと素知らぬ顔をすれば、嘘を言つて
 るぜ三十日の年始を受ける家は無いやな、親類へでも行きなす
 つたかと問へば、とんでもない親類へ行くやうな身に成つたの
 さ、私は明日あの裏の移轉をするよ、あんまりだしぬけだから
 嘘お前おどろくだらうね、私も少し不意なのでまだ本當とも思
 はれない、兎も角喜んでお呉れ悪い事では無いからと言ふに、本
 當か、本當か、吉は呆れて、嘘では無いか申戲では無い
 か、其様な事を言つておどかして呉れなくても宜い、己れはお前
 が居なくなつたら少しも面白い事は無くなつて仕舞ふのだから
 其様な厭な戲言は廢しにしてお呉れ、え、詰らない事を言ふ

ひと かしら
 人だと頭をふるに、嘘ではないよ何時かお前が言つた通り上
 等の運が馬車に乗つて迎ひに來たといふ騒ぎだから彼處の裏に
 は居られない、吉ちゃん其うちに糸織ぞろひを調製へて上るよ
 と言へば、厭だ、己れは其様な物は貰ひたくない、お前その好い
 運といふは詰らぬ處へ行かうといふのではないか、一昨日自家の
 半次さんが左様言つて居たに、仕事やお京さんは八百屋横町
 に按摩をして居る伯父さんが口入れで何處のかお邸へ御奉公に
 出るのでさうだ、何お小間使といふ年ではなし、奥さまのお側
 やお縫物師の譯はない、三つ輪に結つて總の下つた被布を着る
 お妾さまに相違は無い、何うしてあの顔で仕事やが通せるものか
 と此様な事を言つて居た、己れは其様な事は無いと思ふから、聞

違ひだらうと言つて大喧嘩を遣つたのだが、お前もしや其處
 へ行くのでは無いか、其お邸へ行くのであらう、と問はれて、何
 も私だとして行きたい事は無いけれど行かなければならぬのさ、
 吉ちやんお前にもう逢はれなくなるねえ、と唯言ふことなが
 ら萎れて聞ゆれば、どんな出世に成るのか知らぬが其處へ行く
 のは廢したが宜からう、何もお前女口一つ針仕事で通せな
 い事もなからう、あれほど利く手を持つて居ながら何故つまらな
 い其様な事を始めたのか、あんまり情ないではないかと吉は我身
 の潔白に較べて、お廢しよ、お廢しよ、斷つてお仕舞など言へ
 ば、困つたねとお京は立止まつて、それでも吉ちやん私は洗ひ張
 に倦きが來て、もうお妾でも何でも宜い、何うで此様な詰らない

づくめだから、いつその腐れ縮緬着物で世を過ごさうと思ふの
 ぎ。

おもひ切つた事を我れ知らず言つてほゝと笑ひしが、兎も角も家
 へ行かうよ、吉ちやん少しお急ぎと言はれて、何だか己れは根つ
 から面白いても思はれない、お前まあ先へお出よと後に附いて、
 地上に長き影法師を心細げに踏んで行く、いつしか傘屋
 の路次を入つてお京が例の窓下に立てば、此處をば毎夜音づれ
 て呉れたのなれど、明日の晩はもうお前の聲も聞かれない、世の
 中つて厭なものだねと歎息するに、それはお前の心からだとして
 不満らしう吉三の言ひぬ。

お京は家に入るより洋燈に火を點して、火鉢を掻きおこし、吉

ちやんやお焙りよと聲をかけるに己れは厭だと言つて柱 際に
 立つて居るを、それでもお前寒からうではないか風を引くといけ
 ないと氣を附ければ、引いても宜いやね、構はずに置いてお呉れ
 と下を向いて居るに、お前は何うかおしか、何だか可笑しな様子
 だね私の言ふ事が何か疝にでも障つたの、それなら其やうに言つ
 て呉れたが宜い、黙つて其様な顔をして居られると氣に成つて仕
 方が無いと言へば、氣になんぞ懸けなくてもいゝよ、己れも傘屋
 の吉三だ女のお世話には成らないと言つて、凭かかりし柱に脊
 を擦りながら、あゝ詰らない面白くない、己れは本當に何と
 言ふのだらう、いろいろの人が鳥渡好い顔を見せて直様つま
 らない事に成つて仕舞ふのだ、傘屋の先のお老婆さんも善い人で

あつたし、紺屋こうやのお絹きぬさんといふ縮ちぢれつ毛けの人も可愛かあいがつて呉くれたのだけれど、お老婆ばあさんは中ちゆう風ふうで死ぬしし、お絹きぬさんはお嫁よめに行くゆくを厭いやがつて裏うらの井戸いどへ飛とび込んで仕舞しまつた、お前はまへ不ふ人情にんじやうで己おれを捨すて、行くゆくし、もう何も彼かもつまらない、何なんだ傘屋かさやの油あぶらひきなんぞ、百人ひやくにん前のまへの仕し事ごとをしたからとつて褒美ほうびのひと一つも出でやうでは無なし、朝あさから晩ばんまで一寸いっすん法師ぼしの言いはれつゞけで、それだからと言いつて一いっし生しやう經たつても此この身せい長いが延のびやうかい、待まてば甘か露ろといふけれど己おれなんぞは一日いちにち々く厭いやな事ことばかり降ふつて來きやがる、一昨日をと、ひはんじ半次やつの奴やつと大喧嘩おほげんくわをやつて、お京きやうさんばかりは人ひとのめかけで妾めかけに出でるやうな腸はらわたの腐たくつたのではないと威張みばつたに、五日いつかとたゞなずかぶとに兜かぶとをぬがなければ成ならないのであらう、そんな嘘うそつ吐つきの、

ごまかしの、慾よくの深いお前まへさんを姉ねえさん同様どうやうに思おもつて居ゐたが口くちを惜ちしい、もうお京きやうさんお前まへには逢あはないよ、何どうしてもお前まへには逢あはないよ、長なが々御世話おせわさま此處こゝからお禮れいを申まをします、人ひとをつ
 け、もう誰だれの事ことも當あてにするものか、左様さやうなら、と言いつて立たちあが
 り沓くつぬぎの草履ざうりげ下駄たあしに引ひかくるを、あれ吉きつちやんそれはお前まへ勘か
 んちが違ちがひだ、何なにも私わたしが此處こゝを離はなれるとてお前まへを見捨みすてる事ことはしない、
 わたし私わたしはほんとに兄きやうだい弟おともとばかり思おもふのだもの其様そのんな愛想あいそづかしは
 ひど酷ひどからう、と後うしろから羽はがひじめに抱だき止とめて、氣きの早はやい子こだねと
 お京きやうの諭さとせば、そんならお妾めかけに行くを廢やめにしなさるかと振ふりかへ
 られて、誰だれも願ねがふて行く處ゆところでは無ないけれど、私わたしは何どうしても斯か
 うと決けつ心しんして居ゐるのだからそれは折せつ角かくだけれど肯きかれないよと

い
言ふに、吉は涙の眼に見つめて、
お京さん後生だから此肩の手
を放はなしておくなさい。

青空文庫情報

底本：「樋口一葉全集第二巻」新世社

1941（昭和16）年7月18日発行

1942（昭和17）年4月10日再版

底本の親本：「校訂一葉全集」博文館

1897（明治30）年1月9日発行

1897（明治30）年6月再版

初出：「国民之友 二七七号」

1896（明治29）年1月4日

※送りがな、振りがな、漢字の使い方の不統一は、底本通りです。

※誤植を疑った箇所を、「校訂一葉全集」博文館、1897（明治30）年1月9日発行の表記にそって、あらためました。

入力：万波通彦

校正：岡村和彦

2014年11月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

わかれ道

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>